

神戸の小さなさとう問屋だった鈴木商店が大番頭となり、世界の国くに
を相手に商売する一大商社に育て上げた。

商売のことしか頭になかった

金子直吉

1866(慶応2)年
1944(昭和19)年

影響を受けた偉人

坂本龍馬

特技

どこでも寝られる

商売命!

あだ名

えんとつ男
財界のナポレオン

ファッション

よれよれの服に山高帽
(中には頭を冷やすための氷のう入り)



くず拾いから 大商社の大番頭へ

大正時代、三井・三菱といった大財閥をぬき、売り上げ日本一となった「鈴木商店」。もとは神戸でさとうをあつかう小さな問屋だったこの商店を、関係会社50社、社員とその家族をあわせて30万人にものぼる大商社にした人物こそ、金子直吉です。

直吉は、三菱財閥の岩崎弥太郎(↓16ページ)と同じ土佐(現在の高知県)の出身。父親が事業に失敗し、貧しいくらしをしていた直吉は、学校には通えず、紙や金属などを拾って売る「くず拾い」をして家族の生活を支えています。

直吉は11歳のころから奉公(↓58ページ)に出で、やがて質屋の丁稚(↓58ページ)となります。そして、そこでお金を借りに来る人が

代わりにあずけていく本を読んで勉強しました。のちに自分のことを「質屋大学出身」というほど、直吉にとっては、それが知識を身につける貴重な機会でした。

この質屋の主人にしようかいされ、直吉は20歳のときに鈴木商店に入ります。これが、やがて大番頭(今でいう営業・経理部長)となり、そのうち専務取締役となる、直吉の実業家人生の始まりでした。

さまざまな悪名をもち ねたみの的

鈴木商店で、直吉は集金係を任せられました。それがイヤになって、土佐に逃げ帰ったこともありました。しかし、母にさとされ鈴木商店に戻った直吉は改心します。とくに主人の岩治郎が亡くなったあたりは、岩治郎の妻・よねを支え、商売に打ちこむようになり

直吉のつぶやき

鈴木商店をついだヨネさんは「お家さん」とよばれ、わたしが失敗しても決してしからなかった。だから、わたしはお家さんのためにも命をかけて鈴木商店を守ろうと思いました。





よくも悪くも金子直吉はこんな人

▼ がんばりで、思い立ったらすぐに行動するタイプ。

▼ 仕事に夢中で、まわりが見えなくなることがあった。

▼ 自分が悪者にされても、弁明をしなかった。

から引きずりおろしたら)「10万円」という、懸賞金騒動まで起こりました。

実際、鈴木商店は米の買いしめなどしておらず、直吉は、商売のためではなく国民のために、足りない米を外国産の米でおぎなおうと奔走していました。しかし、直吉はこのことについて、いっさい弁明はしませんでした。

財界のナポレオン

さまざまな悪名をもった直吉でしたが、一方で称賛された人物でもありました。明

治・大正時代の実業家・福沢桃介(福沢諭吉の娘もこ)は、直吉を「わが国におけるナポレオンに比する英雄」とたたえました。多少強引なところはありましたが、直吉には自分がもうけようとか、権力をもとうとか、そういう欲はありませんでした。生活は質素で、趣味で釣りや俳句をたしなむような直吉でしたが、すぐれた人間性や手腕で仕事にまい進し、鈴木商店や日本の経済を大きく成長させたのです。直吉は、明治時代から昭和初期を代表する実業家といえるでしょう。

洗濯栄一の証言

金子は事業家として天才でしたよ。じつは一度、いっしょに仕事をしようとしたのですが、あっさり断られたよ。よほど鈴木商店が大切だったんだな。

直吉の言い訳

ある日、仕事帰りの列車の中で女性が「どうぞ」と席をゆずってくれた。おりてもその女性がついて来るから、よく見たら妻だった……。仕事のことで頭がいっぱいでした。

ました。

直吉は、もうれつな仕事人間でした。そして、強引で向こうみずなやり方から、鈴木商店や直吉にはさまざまな悪名がつけられ、根拠のないうわさが立てられました。

たとえば、大番頭の直吉がさまざまな商売に手を出すので「タコ商店(手足がたくさん出ている)」、外国との商売をするために意図的に役人に近づくので「政商(政府の商店)」、やり手でえんとつのある工場を次つぎに建てたので「えんとつ男」など……。さわめつきは、1918(大正7)年の米騒動のときのことです。米騒動とは、第一次世界大戦中、米の買いしめなどが原因で米のねだんが急激に上がったことに対して、全国各地で起こった民衆運動です。このとき、鈴木商店が米を買いしめていくといううわさが広まりました。そして、鈴木商店の本店が焼き打ちにあり、さらに、「金子直吉の首を取ったら(組織のトップ



時代と事業の豆知識

子どもが住みこみではたらいた奉公と丁稚奉公

江戸時代から昭和初期にかけて、日本では、10代前半ぐらいまでの子どもが商家などにやられて、住みこみではたらくということがよくありました。これを「奉公」といい、仕事の使い走りや雑用、家事の手伝いをするなどで、食料や日用品を支給してもらっていました。

とくに大坂(のちの大阪)などの商業地では、年季奉公(期限を決めた奉公)をする子どもを「丁稚」といい、弟子として仕事を覚えたら17〜18歳で昇格や独立をさせてもらえました。

のちに大番頭となつて手腕をふるう直吉のほかに、子どもころに奉公に出たり丁稚奉公として修業したりして、のちにその経験を生かして実業家として成功した人が数多くいます。